

平成 2 6 年 6 月 1 0 日現在

機関番号：14303

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23611013

研究課題名（和文）伝統工芸における日本的グラフィック表現の展開について

研究課題名（英文）japanese design in traditional crafts

研究代表者

中野 仁人（Nakano, Yoshito）

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授

研究者番号：10243122

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 4,000,000 円、（間接経費） 1,200,000 円

研究成果の概要（和文）：京都では、1200年以上前から日本の都として発展する段階で、普通の生活を支えるものづくりと、一方で皇族や貴族のための豪華な調度品や衣服をつくりあげるために、高度な技術が誕生し、そしてその技術が現在まで脈々と受け継がれてきた。伝統工芸の中には、その技術に裏打ちされた意匠、図案が多数存在し、これまでにそれらの表現は工芸品以外の造形物にも数限り無い影響を及ぼして来た。本研究では、伝統工芸に受け継がれて来たさまざまな日本の表現を収集、調査分析し、継承すべき伝統工芸の新たな可能性と次のデザインの方向性を探ったうえで、実際のデザインの適用展開をおこない、新たな工芸品のかたちを提案した。

研究成果の概要（英文）：Kyoto was staged for development as the capitol of Japan more than 1200 years ago, and so it was the home of various crafts to support daily life, while at the same time creating various furniture and clothing for the royalty and nobility. Because of this, many high grade techniques were developed and have been passed down to the present day.

The concept for this project originated with the idea that artisans specializing in the historically traditional crafts of Kyoto would collaborate with Nakano Lab to create pieces showcasing the relevance of traditional crafts in modern day life. Rather than we simply sketching designs and leaving the creation of the pieces to the artisans themselves, the idea was to come in contact with the materials used, break through technical barriers and truly experience the depths of traditional crafts while jointly creating works of art.

研究分野：グラフィックデザイン

科研費の分科・細目：デザイン学・デザイン学

キーワード：デザイン 伝統工芸 図案 京都 グローバル 文化

1. 研究開始当初の背景

これまでの日本のデザインの研究は、第二次世界大戦後の、それ自体の発展の経過を辿るものがほとんどであり、江戸時代から昭和にかけての美術史、工芸史とは分けて捉えられるのが普通であった。一方、伝統工芸に関しては、業種毎のつながりの中で発展し、たとえばその図案の変遷に関しても他の業種と比較分類するように体系的に研究されてきたことはほとんどなかった。今回の研究は史論的・理論的な研究に終始するものではなく、伝統工芸工房での実際のものづくりをもとに技法と図案との関連性について考察するとともに、工房に伝わる過去の図案の今日的利用を検討しながら試作をあげて市場にむけて展開することを目指すことにより、実践的なデザインの制作に関する立体的な研究をおこなうものである。研究代表者が研究者でありながらグラフィックデザイナーであるからこそ可能な観点からの研究であり、それが本研究の大きな特質でもある。

こういった実践と理論を結びつける研究は海外でもその必要性が認識されつつあるが、まだ明確な形で結実した例がほとんど見られない。これまでにこういった研究の必要性に関して、研究代表者は韓国、タイ、イタリア、フランスなどの研究者およびデザイナーと意見交換を重ねてきた。本研究でも成果の一部を海外で発表することにより、日本の伝統工芸の新しいデザインに対する国際的かつ客観的評価を求める。

研究代表者はこれまでに、京都にある複数の伝統工芸工房において新しい商品開発を進めてきた。しかし、デザインの指針となるべきものが各工房内では何ら系統立てて整理されていないという現状がほとんどであることがわかった。そしてそのことは工房の職人たちも承知しており、大半がなんらかの整理分類の必要性を感じている。また、他の伝統工芸品のデザイン、あるいは現代のさまざまな商品のデザインとの接点を求める傾向もあきらかであった。そこで本研究はそれらを相互に有機的に関連づけ、日本的グラフィック表現というキーワードのもと、効果的なデザインの方角性を探るという研究の着想に至った。

現在、海外において何度目かの日本ブームが巻き起こっている。これまでの日本趣味とは異なり、漫画やアニメに端を発した日本的なものの流行である。しかしながら日本に興味を持った海外の若者たちはアニメに留まらず、日本人の生活、日本の伝統的なものへの強い関心を示し始めている。そしてかつて19世紀末のジャポニズムのように表層的な日本的イメージの受容から、やがて日本の精神性の探求という段階に入ってきている。今

回、この世界的に関心が高まっている日本的表現を捉え、今日的役割を果たしているさまざまなデザインにおけるそれらの受容を考察することにより、工芸図案がもたらした日常生活の向上という精神性をデザインの側面から検討していこうとするものである。

2. 研究の目的

我が国、とくに京都には数多くの伝統工芸の技術が今に受け継がれている。しかしそれを若い世代が引き継ぎ、次の世に残していくことが非常に難しくなっている。伝統工芸の中には、その技術に裏打ちされた意匠、図案が多数存在し、これまでにそれらの表現は工芸品以外の造形物にも数限り無い影響を及ぼして来た。しかしそれさえも、伝統工芸の将来を考慮すると、素晴らしい表現の継承が途絶えてしまいかねない。材料や道具を作る人が消え、生活を支えることが出来なくなれば職人は制作を取り止める。絶やさないためには、現代に受け入れられるよう変化して生きつづける智恵と工夫が求められている。しかし、いくら変化しつづけたとしても、迷ったとき戻ってゆけるところ、確認できる根元をしっかりと見つめるべきである。

本研究では、伝統工芸に受け継がれて来たさまざまな日本的表現を収集、調査分析し、またそれが他のデザイン作品に及ぼした影響をも追求することにより、継承すべき伝統工芸の新たな可能性と次のデザインの方角性を探り、新たな工芸品のかたちを提案していくことを目的とする。

例えば、日本の現代の視覚デザインを概観する時、ヨーロッパあるいはアメリカといった西欧社会に追いつこうとしてきた20世紀の流れの中でモダニズム的表現が目指された一方で、日本の独自性も顕著に伺える。文字や図像の形成法、モチーフの便化法、空間の扱い、色彩の扱いなど、日本の伝統工芸・伝統文化に根ざした感覚が近代の視覚デザインに活かされている。そして近年その特異性は、日本内外における共通した造形要素のひとつとして認知されてきている。つまり、日本の伝統が作り上げて来た日本的表現が世界的な表現へとシフトして来ているのである。

本研究では、以下を目標とさだめた。

- (1) 各工房における図案の調査、分析
- (2) デザインにおける日本的表現の抽出と整理
- (3) 伝統工芸の職人たちと技法の上での表現の追求
- (4) 新たな日本的表現のデザインの提案
- (5) 伝統工芸工房での試作

- (6) 作品集の制作
- (7) 日本及び海外での作品の発表

3. 研究の方法

本研究は大きく3つの方向から進める。まず、すでに研究代表者が商品開発を目標に共同研究を開始している工房あるいは会社（鍔金具、金彩、京瓦、かるた、絞り、組紐）とこれから連携を予定している伝統工芸に従事する若手職人（金箔、風呂敷、京唐紙）らとともにそれぞれの工芸品のデザインに関する調査分析をおこなう。また一方で工芸品に限らず、近年のデザインにおける日本的グラフィック表現の特質、変遷をたどる。それはつまり、消費者がデザインを通して、日本的表現を如何に感じ、受容してきたかの検証である。そしてそれらの接点を探り、現代の日常生活、京都の伝統工芸、新たなデザインの方向性を、各工房との実制作をふまえながら探求していくものである。

伝統工芸工房とともに、現在生産されている製品および過去に制作されたもののデザインに関して、現物を通じて調査・分析をおこなう。とくに初年度は、現在すでに本研究代表者との交流を進めている、森本鍔金具、金彩荒木、浅田製瓦、大石天狗堂かるた、京都絞栄会を対象に調査をおこなう。これらの工房は創業以来受け継がれて来た図案と新たな商品開発のための新しい図案の生成との格差を埋める作業に苦慮して来た。その中で生き残って来た図案の特徴を検証し、抽出することは、その工芸品を人々がどのように受容して来たかを推し量ることでもある。

また、江戸時代から現代に至る京都の工芸品に関するデザイン資料及び掲載書籍等資料を収集、分類し、分析、検討を加える。工芸に用いられて来た図案が、同種工芸品においてあるいは他種工芸品においてどのように仕様および引用されてきたか、また現代のデザインにどのように影響を与え、展開されて来ているかを検証する。

現在、京都工芸繊維大学附属図書館には開校以来収集保存されて来た京都の伝統工芸のための図案集や資料が多数収蔵され、現在は活用されずに保管されている。また、同じく本学美術工芸資料館において収集・保存されている工芸品は、その元となった図案資料とともに貴重な比較研究の対象となりうる。さらに同資料館が収蔵するポスター15,000点と、本研究代表者が収集を続けている日本のポスターには、伝統的日本的イメージの引用がなされているものが存在し、伝統図案のそれらデザイン作品への影響についても検討が可能である。

また伝統工芸にたずさわる若手の職人た

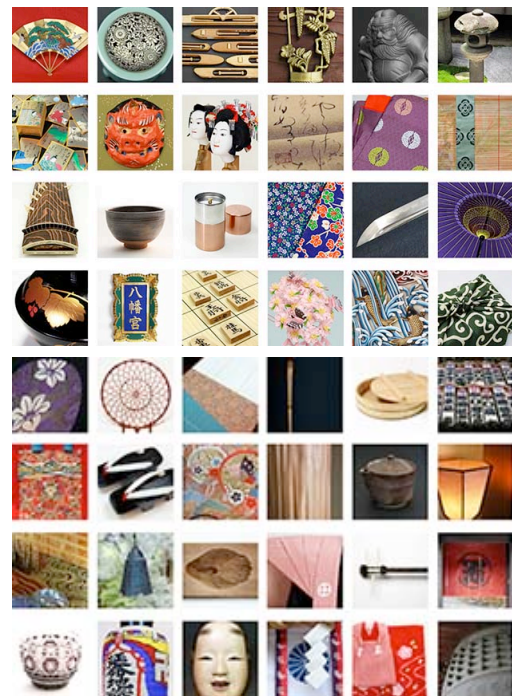
ちとの話し合いをはじめ、京都の将来をにやう職人自身の意識調査に着手する。彼らはただ伝統技術を継承するだけではなく、その技術に今日的意味を見だし、新たな表現の可能性を追求し始めている。伝統工芸の職人自身が何を守り、何を変えていこうとしているのかは、本研究の重要なポイントである。

そして今回の研究はそういった各職人、各工房を横に繋げ、京都における伝統工芸全体のつながりを築き上げるという大きな目標の第一歩として位置づけられるものである。

4. 研究成果

○伝統工芸の取材、撮影、紹介

2年にわたって伝統工芸を巡る資料収集、工房訪問、職人へのインタビュー、ディスカッションをおこなった。そして、工芸品を撮影し、そのうちの360点を京都新聞紙上に連載、さらに追加して1年365分の工芸品と四季おりおりの関係を提示した書籍としてまとめ、2013年10月に出版した。



日本の365日に対応する伝統工芸品の取材と撮影





『工芸の四季』京都新聞出版センター 2013

○ 伝統工芸の企画、デザイン提案

京都の伝統工芸工房と連携し、あらたな購買層獲得のために商品の企画・デザインを提案した。工房を訪ね、その技法の特質とそれによって生み出される工芸品の特徴について調査分析を重ねた。各工房で保管されている図案の調査と現在も生み出され続けている新しい図案の傾向について比較分析し、技法と表現の関係について検討した。それと同時に工芸品をめぐる市場調査をおこない、今求められる工芸品の価値について考察を進め、その後、複数の工房を横に繋げるかたちでブランドを想定し、ブランドイメージにあったデザインを構築、実際の工芸品を作り上げるプロジェクトを展開した。とくに注目したのは効果で特別なものとしての伝統工芸品ではなく、現在の日常生活の中で生きるモノとしての伝統工芸技法の活用である。生活になじみ、使う喜びを感じられるものづくりを目標に、商品の企画構想を練った。その間に、協力頂く4つの工房（京瓦、金彩、鍔金具、唐紙）と密に連携し、方向性について検証を進め、デザインの提案、製作技法の検討をおこなった。こういった一連の流れは、伝統工芸工房における新しいデザインプロセスの導入の可能性を示唆することとなった。また、作品を展示し、なおかつカタログにまとめることにより、事業をわかりやすく視覚化することが出来た。

なお、期間内に以下の内容で企画、デザイン、展覧会を開催した。

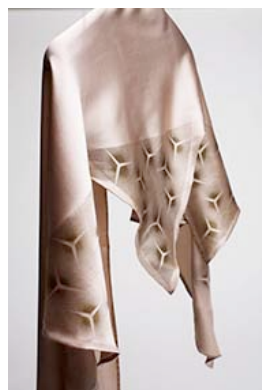
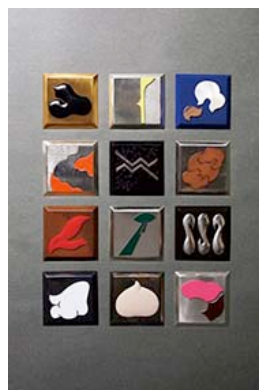
- ・ 2011年『節目心』
二十四節気に贈るおくりものを想定し、伝統工芸の技法を用いたもののデザイン、制作をおこなった。京都と直島で展覧会を開催した。



『節目心』カタログ、帯留め、茶入れ、風炉先屏風 2011

- ・ 2012年『SWITCH』

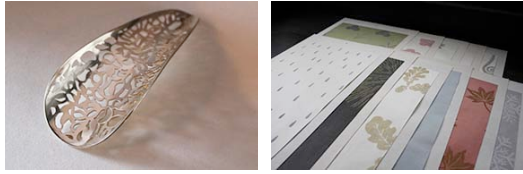
伝統工芸の技法に実験的表現を持ち込み、新たな工芸品の可能性を探る。例えば、瓦の表面に瓦素材のシルクスクリーンプリントを施すなど、新技術を開発した。京都で展覧会を開催。



『SWITCH』 鍔金具による新しい釘隠し、デジタルイメージの金彩スカーフ、瓦シルクスクリーン、瓦の花器 2012

- ・ 2013 年『伝統の虫』

何気ない日常生活の中のものに伝統工芸の技術を持ち込み、生活を彩る提案。京都の町家での展示。



『伝統の虫』 鋳金具による靴べら、唐紙によるカレンダー、京町家での展示 2013

- 検討、議論

2014 年 3 月に、シンガポール国立大学において、伝統工芸プロジェクトの成果物の展示会とともにシンポジウムをおこなった。いずれの国においてもグローバルなものづくりを目指すには、まず自国で培われてきた文化や伝統技術を再検証し、それを現代の世の中にあった形で展開することが重要であるという認識を再確認した。



シンガポール国立大学での展示およびシンポジウム 2014

本プロジェクトにおいて、京都の伝統工芸は過去のものではなく、未来につながるものであり、世界に展開するものであることが明らかになった。そして日本のものづくり、デザインの根本が伝統工芸にあり、また現代の生活におけるモノの意義を問いただす意味でも、今後も伝統工芸におけるデザインの研究を継続しなければならない。

5. 主な発表論文等

〔新聞掲載〕(計 360 件)

○ 『工芸の四季』 澤田美恵子・中野仁人、京都新聞朝刊、2012 年 4 月 1 日～2013 年 3 月 31 日

〔図書〕(計 2 件)

○ 『工芸の四季～愛しいものがある生活』 中野仁人・澤田美恵子、京都新聞出版センター、216 ページ、2013 年

○ 『紙-昨日、今日、明日』 日本・紙アカデミー編 伊部京子・並木誠士・鈴木佳子・田村正・中野仁人・辰巳明久・竹尾稠・小山欽也、思文閣出版、172 ページ (pp89-94)、2013 年

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中野 仁人 (Nakano, Yoshito)

京都工芸繊維大学・工芸科学研究科・教授
研究者番号：10243122